

実習者名 S.K.（6年生）

実習期間 平成29年1月6日（金）～2月3日（金）

実習施設 中尾クリニック、宝在宅医療クリニック

様々なケースの患者に遭遇し、多くのことを学び経験し、非常に疲れ、それでいてとても面白い1ヶ月だったように思います。

この1ヶ月の経験を活かすためには、もっと多くの医学的経験を積むこと、診察や手技などの技術（特に聴診）を磨くこと、そして何よりもこれらすべての基礎となる医学全般の広く深く確かな知識を身につけることだと思います。

この3点を意識して残りの高次臨床実習にも臨みたいと思います。

最後になりましたが、一医学生が患者さんのご自宅に上がれるという、一種ありえないシチュエーションを与えてくださった中尾先生、松尾先生、原田先生はもちろん、各クリニックの職員さん、そして地域包括ケア教育センターの先生方には深く感謝申し上げます。



実習者名 S.W.（6年生）

実習期間 平成30年1月9日（火）～2月2日（金）

実習施設 中尾クリニック、宝在宅医療クリニック、谷川放射線科胃腸科医院

一ヶ月間を振り返ると、大学病院では考えたこともなかった沢山のことを、考える機会を頂けたと思います。大学病院の中では、主に経過の重い急性の患者さんが入院されていて、私が学んだのは病歴の取り方、治療方針の立て方がほぼ全てでした。処置にしてもやり方・合併症は学びますが、その処置を受けた人が長い時間の後、どう過ごすのかということや、生活の中で何が困るのかは想像することはありませんでした。

在宅医療では、患者さんの生活の中に入り、（病院では医者が上から目線とは言いませんが）、誇張かもしれませんが患者家族の方が強い立場にあるように感じます。その中に医者として一人で入り込んで行くのはすごく勇気がいります。他にも家庭内に入ると、経済状況や社会的立場など本人が外では出たくないものを見ることもあります。臭いで戸惑うこともありました。

でも、それをしっかり見るのは大事なことであり、国からの補助があることを伝えたり、訪問ヘルパーさんや見守りの利用を提案したり、色々とその人のためにできることが提案できたりします。本当に困っている人を助けるために、社会福祉のシステムも知っておく必要があり在宅医療でできる仕事の幅広さを感じました。

病気だけでなく、色々な面を併せてその人を診る、というのが在宅医療なのだと私は感じました。

これからも、在宅医療で見て来た患者さんの全体を見るということを少しでも活かせたらと思います。一ヶ月間、すごく勉強になりました。機会をくださった永田先生はじめ、中尾クリニックの皆様、宝在宅クリニックの皆様、ありがとうございました。



実習者名 J.N. (6年生)

実習期間 平成30年4月5日(木)～5月2日(水)

実習施設 中尾クリニック、宝在宅医療クリニック、谷川放射線科胃腸科医院

在宅診療実習を通して大きく2つのことを学びました。

1つ目は、医療における人と人とのつながりの大切さについてです。病院では患者さんとコミュニケーションをとるときに、病気のことが中心になってしまい、患者さんの日常生活や家庭の環境まで考えきれない場合もあるかと思います。しかし訪問診療では、病気だけでなく患者さんの家族や生活環境、社会的な側面まで把握したうえで、患者さんにとってベストな治療を提供しているのが印象的でした。在宅医として、患者さんの考えや思いを受け止めようとする姿勢はもちろん、その訴えに答えるための幅広い知識や経験も必要であると感じました。また、そうして得た患者さんとの信頼関係はとても強いもので、患者さんの死後もその家族と関係を持ち続けることも少なくないと知りました。

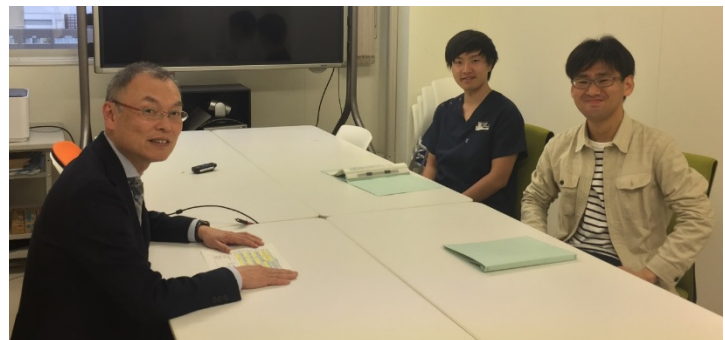
2つ目は、医療は一筋縄ではいかない場面が多々あるということです。例えば、終末期の患者さんにどこまで輸液・栄養管理を続けていくかという問題は、患者さんの尊厳だけで判断できる問題ではなく、家族関係や金銭的・社会的背景などが複雑に絡み合う場合もあると知りました。その他にも、治療に協力的でない患者さんや金銭面で問題を抱えている患者さんなど、医療知識だけでは対応できない症例と出会う機会がありました。こうした患者さんへの対応は先生によって異なる部分もありましたが、共通していたのは何度も患者さんの元へ足を運んで患者さん・家族の話を聞くということでした。すぐに問題の解決ができたり、完全に解決することはできないとしても、時間をかけて少しずつでも患者さんと最善策を見つけ出そうとする姿勢は、医師としてとても大切なものに思えました。

最後になりましたが、実習先の先生方・医療関係者の皆様、永田先生、1か月間ありがとうございました。

実習者名 S.Y. (6年生)

実習期間 平成30年4月5日(木)～5月2日(水)

実習施設 中尾クリニック、宝在宅医療クリニック、
谷川放射線科胃腸科医院



1か月を通して多くのお宅に訪問し、在宅医療の最前線を目の当たりにして、多くを学ぶことができました。

各患者の有する疾患や問題点を理解し、その人に合った治療やケアをどうしていくか考えることができた実習だったと思います。病院内で実習してはなかなか想像し得ない、各家庭での問題や生活環境を今回の実習で実際に目にして、病院で治療を終えた後に自宅でどのように生活するか（あるいは生活できるかできないか）を考えることができるようになりました。

また、今後の実習や臨床研修でも役立つだろう知識や技術も学ぶことができました。

生活保護や年金、原爆手帳など金銭的問題、独居やコミュニケーションなどの社会的問題、スピリチュアルペインへのケアなども含めて、患者や家族の様々な問題に対して考える実習になり、とても充実した1か月となりました。

最後になりましたが、実習でお世話になりました長崎宝在宅医療クリニック、谷川放射線科胃腸科医院、中尾クリニックの先生方やスタッフの皆さん、熱心に指導していただきありがとうございました。今回の経験を無駄にすることなく、今後に生かしていきたいと思います。

実習者名 H.U.（6年生）

実習期間 平成30年5月7日（月）～6月1日（金）

実習施設 中尾クリニック、宝在宅医療クリニック、谷川放射線科胃腸科医院

在宅診療実習を通して一番強く思ったのは、自分もいつか在宅診療をやる医者になりたいということでした。この実習を選ぶ前は、在宅診療について正直ちゃんと考えられてはいませんでした。何も知らなかった頃考えていたデメリット（検査できなさそう、治療できなさそう、きつそう）が意外とそうでもない、ということはこの実習に来る前に医と社会などで学んでいましたが、在宅であるメリットについては何も考えていませんでした。実際在宅診療を間近で経験させていただき、医療だけでなく対人関係が重要になる職業全てで最も欲しい情報である「相手の価値観」でできた空間に入ることができるというとても大きく大きなメリットに気づくことができました。

今までの病院の実習では患者さんに病院に来ていただきお話を聞く中で、病気のことはもちろん、その方の価値観、目的を先生がどう探っているか、自分ならどう探るかに注意してきましたが、この実習ではその点で目からウロコの連続でした。

そして、看取りも経験し、やっと慣れてきて顔を覚えてもらった矢先の方が亡くなる辛さ、責任を感じました。患者さんや家族の価値観に触れ、スタッフや病院、その連携室の皆さん、施設の方や薬剤師さんと協力し皆の気持ちが前向きになれる方法を探し実行し続け、看取り、その後線香をあげ想う。大昔からの医者原点であり、もしかしたらある意味最先端たる現場で実習させていただき、誠に感謝いたします。



実習者名 H.S.（6年生）

実習期間 平成30年5月7日（月）～6月1日（金）

実習施設 中尾クリニック、宝在宅医療クリニック、谷川放射線科胃腸科医院

この一か月間、中尾先生のクリニック、松尾先生のクリニック、谷川先生のクリニックでそれぞれ実習させてもらいましたが、大学病院の中での実習では体験できないようなことばかりを経験することができたのでとても勉強になりました。病院では患者の病気にフォーカスを当てて診ていくことが多く、患者の住居環境や家族構成などの背景についてはほとんどわからない、知ることができないということを改めて実感しました。

また、紹介状やカルテといった文書での情報も実際に患者を診て得ることができる情報よりもその量がかなり少ないということも実感しました。この在宅診療実習を経験して、将来やはり在宅診療や地域医療の分野に携わりたいという気持ちが強くなりました。



実習者名 S.S.（6年生）

実習期間 平成30年6月4日（月）～6月29日（金）

実習施設 中尾クリニック、宝在宅医療クリニック、谷川放射線科胃腸科医院

たくさんの患者さんのお宅にお邪魔させていただいて思ったのは、みなさんのお宅で本当に個性や違いがあるということです。そうした環境で診療を行っていくためには、医師側が柔軟にいろいろな価値観を受け入れて、患者さんにとって何が一番良い医療であるのか考える必要があると思いました。在宅管理をしている患者さんは、若年性の神経難病から、高齢者の認知症、末期の悪性腫瘍まで多岐にわたります。そうした違いをしっかりと認識して、何が必要でそこまで話すのか、どこまで踏み込むのか、判断するために経験値をためていく必要があるのではないのでしょうか。それ以前に最も大切なことは、患者さんに対する誠実さなのではないかと思うようになりました。毎日、誠実な気持ちで患者さんと接していれば、先ほど書いたような経験も、信頼も自然に得られるのではないかと感じました。私も今回の一か月の在宅実習の経験を生かして、誠実な診療をする医師を志したいと感じました。



実習者名 H.W.（6年生）

実習期間 平成30年6月4日（月）～6月29日（金）

実習施設 中尾クリニック、宝在宅医療クリニック、谷川放射線科胃腸科医院

学生のうちに医療を別の視点から見てみたいと考えてこの高次臨床実習を選びました。

1か月間在宅医療の実習を行い、患者さんとの接し方・病気との付き合い方等に対する考え方が180°変わりました。「こんな医療もあるのか!」と驚いたことばかりでした。中でも、末期がんの患者さんの姿がとても印象的でした。「もう治療ができない」と言われてから旅行に行ったり、家族で過ごしたり…。もちろん全員ではないですが、がん患者さんであるということをこちらが忘れてしまうほど、生き生きされていて、とても自分らしい生き方をされていると思いました。病院で行う点滴・薬以外の力が、家・家族にはあるのだと感じました。

また、ターミナルの患者さんと接する際どうすべきか、ということについても多く学ぶことができました。患者さんの痛みを取るだけでなく、家族・背景・スピリチュアルペイン等様々なことを考えなければならないのだと感じました。他にも、超高齢社会の中での在宅医の必要性・介護と医療の連携（多職種連携）・現在の制度の問題点・・・等様々なことについて考えることができました。

1か月間、本当に貴重な経験をさせて頂きました。この経験を、今後に生かしていきたいと思います。



実習者名 S.N.（6年生）

実習期間 平成30年7月2日（月）～7月27日（金）

実習施設 中尾クリニック、宝在宅医療クリニック、谷川放射線科胃腸科医院

振り返ってみるとこの4週間、前半は台風から大雨、後半は酷暑と天候にかなりふりまわされた実習となりました。逆にいえばこんな過酷な天候の中で患者さんがどう暮らしているのか目の当たりにできたのは貴重な経験だったと思います。私でも息の切れる坂の上に心不全の患者さんが住んでいて買い物に毎日行っている、エアコンをつけないどころか毛糸のセーターに毛布を着ている方がいる。そして、一人一人の患者さん、一つひとつの家庭を外来では決してとらえられない空気感というか臨場感をもって毎日対面させていただきました。本当にいろんな方がいました。病院ごとの立地条件やメインとしている地域によってもある程度患者さんの言い方は悪いですが質が異なっていて、高齢者では特に地域による気質の差が顕著でした。

そして、患者さん以上に多様だったのはそれぞれの病院の先生方です。3カ所の病院でそもそものシステムだったり店舗だったり異なる点に加えて、そこで働いていらっしゃる先生方が同じ病院でもまた違った考え方、ポリシーを持っていたりしました。それはどれが、誰が正しいとか、間違っているとかの次元ではなく好みと相性の部分なのだと思います。患者さんにとってもそうでしょうし、私自身どの先生がじっくりくるか、というのはやはりありました。きっとそれでいいのだと思います。先生方がみんな一生懸命やっているからこそぶつかる部分、相容れない部分はどうしても出てくるだろうとおっしゃっていました。それはそれでいい。究極のところ社会に貢献したいという医師としての矜持が同じならばどんなことを目指しても良いのだらうと思いました。

医療、医学の実習を超えて人生について学ぶことの多い4週間だったと思います。まだ学生の何者でも無い時期にこれだけのことを考える時間が合ったことは間違いなく未来の糧になるでしょう。しばらく患者さんとふれあわない日々になりますがこの時間を思い出し目の前のことを努力していきたいです。

最後になりましたが、実習をするにあたり受け入れてくださった先生方、永田先生はじめ地域包括ケア教育センターの皆様、大変楽しい実習をさせていただきました。ありがとうございました。

